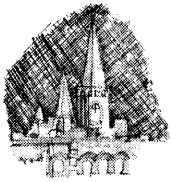
十二月のメアリー・ポピンズ

本田和子



古い年が過ぎて行き、新しい年がやってきます。

大晦日の時計が十二時を打ち終わったら、その時から新しい年が始まるのでしょうか？

それとも？

十二時を打ち続けているその間は、いったいどちらの年なのでしょう。

今年でもなく来年でもない、そのどちらにも属さない、そんな「時のすきま」があるのではないかと、こんなことをいっしょうけんめい考えたことがありました。

児童文学者のトラヴァースさんは、この年のすき間をみつけ出しました。というより、作品の中の不思議な主人公、メアリー・ポピンズが勝手にみつけ出してしまったのかもしれません。

――突然、マイケルは、たいへん重要だと思われることに気がつきました。

「ねえ！」といって、ベッドのなかでからだを起こしました。「正確にいうと、前の年はいつ終わるの？」

「今夜です」とメアリー・ポピンズがそっけなくいいました。「十二時が、打ち始めたときです」

「それで、いつ、始まるの？」マイケルがつづけます。

「なにが、いつ、始まるんです？」メアリー・ポピンズが、てきぱき、ききました。

「新しい年」マイケルが、しんぼう強く、返事をしました。

「十二時が、打ち終わったときです」メアリー・ポピンズは、短く鋭い鼻音をさせて、答えました。

「そう？じゃ、あいだはどうなるの？」とマイケルがききました。――

でも、例によってメアリーは、何も教えてくれませんでした。そして、夜になると、ジェーンとマイケルをベッドに入れてから、メアリーはふう変わりなことを始めました。二人が抱いてねるおもちゃの動物を取り上げ、暖炉の上にのせ、三冊の絵本の頁を開いて、やはり暖炉の上に立てました。いったい、何が起こるのでしょう。

やがて、夜の静けさを破って教会の鐘が鳴り始めました。ガランガラン、チリンチリン、ジャラン、ジャラン。

世界中の鐘が一斉に響き合い、それがハタとやんだとき、「ガーン」と議事堂の大時計が十二の時を打ち始めました。

その時です！大変なことが起こったのは。暖炉の上の人形たちが床にとびおりて、戸口の方へはねて行くのです。

ジェインとマイケルは、へや着をひっかけて飛び出しました。

公園の広い芝生の上には、まんまるい月が銀の光を注いでいます。

声をかけられて振り返ったジェインは、そこにあごひげをはやした奇妙な人をみつけました。その丈の高い人は、おじぎをするとこういうのです。「どうか、ロビンソンとお呼びください！友だちは、みんな、そう呼びます。クルーソーさんでは、あんまり固苦しいですから」

ロビンソン・クルーソーは、絵本の開かれた頁から抜け出して、時間の「すきま」にとび込んできたのです。年に一度の「すきまの時」いること！いること！ハンプティ・ダンプティがいるし、眠り姫がいるし、巨人退治のジャックがいます。古い年は、十二時が打ち始めた時に死んで、新しい年は打ち終わった時に生まれます。そのあいだ、そう、時計があいだの時を十だけ打ち鳴らすあいだが、秘密のすきまなのです。

古いおとぎばなしの中のものが、みんな踊っていました。「赤ずきんと狼」「巨人とジャック」「美女と野獣」が、おのおの、手を組み合い、肩をよせ合って踊っているのです。

「すきま」の中では、あらゆるものが一つになり、永遠の敵同士が許し合います。ただ一つの時で、ただ一つの場所、そこでは、だれもが末ながく幸福に暮らすのです。

ジェーンとマイケルも、親しげな呼び声に誘われて、踊りの輪に入っていきました。そして気がつくと、輪の中央にはメアリー・ポピンズが進み出て、楽し気にからだをゆすりながら、アコーディオンを弾いていたのでした。

ふと、耳をすますと、時計の音が聞こえてきました。

――十一！ああ、走り去る瞬間、ああ、飛びゆく時間！年と年のあいだは、なんと短いのでしょう！幸福になりましょう。末ながく幸福に！

十二！

厳粛に、深遠に、打ち終りの音が響きました。踊りの輪がくずれ、ちらばって、きらきらと輝く姿が、次から次へと芝生から流れ出て、月の輝きのなかにとけこんでいきました。

新しい年がくるのです。！

（お茶の水女子大学）